大阪狭山市の老人福祉についての一考察

42期生

Ⅰ　テーマ設定の理由

「四人に一人が老人という社会が間近にせまっている。」とこの頃よく耳にする。だが、老人福祉は行き届いているのだろうか？こんな疑問から、私の住んでいる大阪狭山市の老人福祉について調べてみることにした。

Ⅱ　研究方法

1. 大阪狭山市役所・老人福祉センター＜さやま荘＞・保健センターへ行ったり・『金剛コミュニティ』や『広報さやま』を読んだりして資料を集める。
2. さやま荘で、職員の方や利用されているお年寄りにインタビューする。
3. 老人に対する保健センターの仕事についてうかがう。
4. 市役所でひとりぐらし老人やねたきり老人（さやま荘を利用できない人）への福祉について教えていただく。

Ⅲ　研究内容

［1］高齢化の波

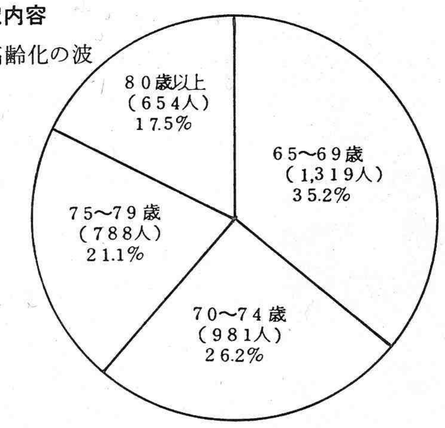


図１　Ｓ．６３　老齢人口

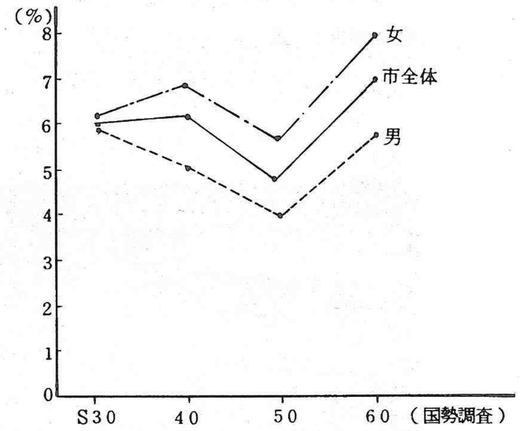


図２　老齢人口比率の推移

昭和６３年の老齢人口は大阪狭山市全人口の７％にあたる。これは、全国平均10.3%に比べれば低い数値である。しかし、老齢人口比率の推移からもわかるように、急激に高齢化が進んでいる。

注…全国平均10.3%は、６０年のもの。

［2］老人福祉に取り組む人々

さやま荘で職員の方に質問した。

質問と答

①さやま荘の利用者数はどれくらいですか。

１日に約１４０人。そのうち２２％の人が毎日利用。

②行っている行事について教えて下さい。

クラブ活動。（書道・手芸等）そして９月１５日から２２日まで＜さやま荘研修クラブ作品展＞を開く。

③他市との交流はありませんか。

南河内福祉センター協議会。大阪府立老人総合センター。ここに大阪府下の施設はみんな入っている。そこでゲートボール、社交ダンス、バンバーゲーム、カラオケで交流する。

昨年の作品展

職員の方のお話

・おじいちゃん、おばあちゃんに会ったらあいさつしてあげてほしい。

・お年寄りの知恵ってすごいから、わからないことや知らないことをたくさん教えてくれる。どんどん聞いてみてほしい。

保健センターの医学療法士の方と保健婦さんにうかがった。

保健センターの老人に対する事業

機能訓練

病院を退院した人のために行う。病院での訓練はお医者さんが手伝ってくれるからできたが、退院して家いに帰ると、自分一人ではできない。ここでは、基本的な運動（ねがえりをうつ、歩く、階段をのぼる等）を行う。医学療法士が指導する。

訪問指導

ねたきり老人の家を訪ねる。そこで、保健婦と看護婦が健康指導を行う。

今の老人福祉の問題点（保健婦さんの話から）

★ねたきり老人の人もさやま荘のような施設へ行きたいと思っているが、行けないのが現状である。

市役所の福祉課で市の政策などについて質問した。

①家族家庭奉仕員とは何ですか。

ねたりき老人、ひとりぐらしの老人の家庭に派遣されて、そうじや洗たくなどの身の回りの世話をするというもの。

②ショートステイ事業について教えて下さい。

ねたきり老人で世話をする人が何らかの理由で老人の世話をできなくなった時、老人を

短期間（７日以内）、施設（特別養護老人ホーム美原荘か四天王寺悲田院特別養護老人ホーム）で世話するという事業である。

③ひとりぐらしの老人やねたきり老人が参加できる行事はありませんか。

「会食会」

市内の身寄りのないひとりぐらし老人が対象。月に二日、さつき荘（心身障害者福祉センター及び母子福祉センター）で無料で昼食をとる。

④私たち子供たちや若い人々に言いたいこと知ってほしいことはありませんか。

★「のけ者にしない」こと。

★おじいちゃん、おばあちゃんの立場になって考えてほしい。

・なぜ、ひとりぐらし老人になってしまったのか。なりたくてなったわけじゃなくて、本当は孫や子供と一緒に住みたい。

・あいさつをするというのは、声をかけるということだ。このことによって、老人をのけ者にしなくなるのではないか。

★自分たちの手でできる福祉について考えてほしい。だいたい、老人に何かするとなるとプレゼントである。しかし、お金はかけなくてよい。家に行ってあげるとか、「おばあちゃん元気？」とか「おじいちゃん、おはよう。これからも元気でね。」というように声をかけるだけでいい。子供たちが、自分たちの手でできる福祉について考えてくれたら、うれしい。

老人福祉に取り組んでいる人々に直接会ってお話をうかがっての考察

保健婦さんのお話で、ねたきり老人は家にいるしかないというのがあった。そこで、私はそういうこともふくめて、自分たちができる福祉について考えてみた。

1．声をかけてあげる

(1)一緒にやろうって感じで誘ってみる。

(2)あいさつをする。

(3)駅などで困っていた場合は、教えてあげる。

2．優しくしてあげる。

(1)席をゆずる。

(2)荷物をもってあげる。

[3] お年寄りの声

さやま荘を利用されているお年寄りにインタビューした。

質問事項

1．おいくつですか。

2．一日の生活を教えて下さい。

3．さやま荘にはどういう目的で来られていますか。

4．今の生活に満足していますか。

5．家では何をしていますか。

6. 一番楽しいことは何ですか。

7. さやま荘のいいところって何ですか。

本当は、「今してほしいことや作ってほしい施設を教えて下さい。」という質問もしたが、みんな「特になし」と答えたので省いておいた。また、7名に聞いたのだがそのうち1名は、となりの公民館に来ていて送迎バスを利用しているだけだということなので、これも省いておいた。

インタビューの結果

1.	85才（女性）	75才（女性）	82才（女性）
2.	8:00 起床 10:00 ～ 11:00さやま荘にくる。	6:00 起床 8:30 足が痛いので医者に行く。	7:00 ～ 8:00 起床 10:10 バスに乗ってさやま荘へ。
3.	クラブ	バンバーゲーム、おふろ、昼食、あんま クラブ（詩吟、民踊）	カラオケ
4.	満足していないが、仕方がない。		
5.	植木の手入れ。 新聞を読む。	仕事がない。	お地蔵さんをまわっている。（運動のため）
6.	新聞を読むこと。		カラオケ
7.		おふろにただで入れてくれる。 さみしくない。	朝はやくからしている。 職員さんが優しい。
お話	若い人は相手にしてくれない。さみしい。	前まで孫の世話をしていた。でも、手がかからなくなった今では、「おばあちゃん」とも言ってくれない。とてもさみしいので、ここに来ている。	私は、さやま荘ができた時からずっと来ている。さやま荘は楽しい。優しくしてくれる。
1.	68才（男性）	72才（女性）	68才（男性）
2.	9:00 さやま荘へ	6:00 起床 9:00 朝食等 10:00 さやま荘へ バンバーゲーム おふろ 3:00 帰宅	10:00 さやま荘へ
3.	ゲートボール バンバーゲーム	バンバーゲーム おふろ	バンバーゲーム
4.	満足している。	満足している。	満足しなければ、仕方がない。

5.	花を育てる。	何もしていない。	何もしていない。
6.	さやま荘に来ることが楽しい。	さやま荘に来ることが楽しい。	
7.	送迎バスなども来て優しい。	優しくしてくれる。	友達がいる。
お話	さやま荘は、友達もたくさんいて楽しい。	さやま荘は最高。去年息子が経営している工場の手伝いをやめた。２９の時夫が戦死して４人の子をかかえて暮らしてきた。若い時は苦労しているので、今は気楽。	この年になったら、仕事もないので、ひま。

老人にインタビューしてみての考察

少ししか聞けなかったけど、私は3つの問題点を見つけた。それは

1. 今の生活に満足していないが仕方ないとあきらめていること。
2. さみしいと思っておられるのに、若い人々は相手にしてあげないこと。
3. 家では何もしていないこと。

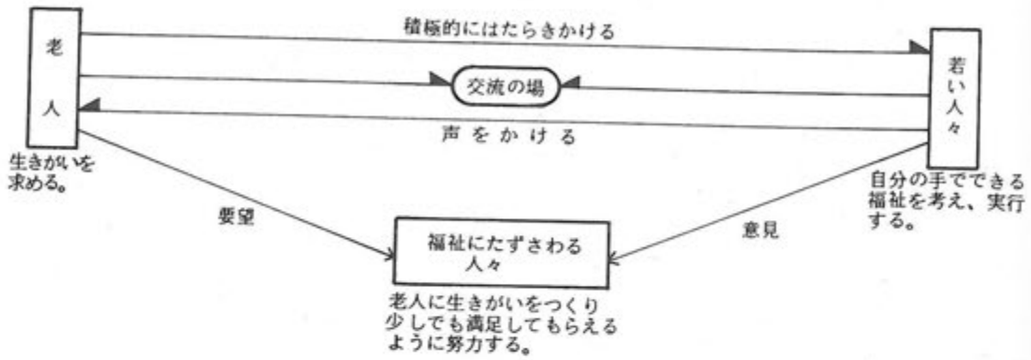
私はそれなりの解決案を考えてみた。まず1つめは、若い人々にはたちうちできないと最初からあきらめていると思う。でも、お年寄りの知恵みたいなものを生かせばよいのではないか、次に2つめは、老人が積極的でないのもあるかもしれないが、やっぱり私たちがいけないと思う。もっと、お互いに声をかけあうことが必要だ。3つめ、生きがいがないということだろう。小さなこと（編み物やぼんさい等）でもよいから、趣味を作ってほしい。

このように、インタビューしてみると、意外だなと思うような老人の気持がわかる。だから私たちは、老人には常に優しく老人の立場になって考えることが必要なのである。

Ⅵ 結　論

いろいろなお話から、大阪狭山市の老人福祉はかなり進んでいるとわかった。しかし、老人だけが社会から離れているように思う。これは大阪狭山市だけではない。若い人々が嫌がらず老人と交流することも必要であろう。また、老人もあきらめすぎている。満足してはいないが仕方がないというのではいけないと思う。若い時に社会の一員として充分頑張ってきたのだから、もっと自信をもって欲しい。そして自分達にできる仕事、たとえそれがどんなに小さな事であってもよいから見つけ出して、家族のため、社会のために頑張って欲しい。それが、自分自身の生きがいになると思う。そのためには若い私達の手助けが必要だ。また、「さみしい。」と言う老人は意外と多かった。老人だけしか利用できない施設ばかりでなく、若い人々もいっしょに団らんできるような“ふれ合いの場”ってないんだろうか。老人は老人同士の方が落ち着くかもしれないが、それではいけないと思う。ぜひ共に話しあえる場をつくって欲しいと痛感した。これからは四人に一人が老人という社会。もっと社会に密着した老人福祉を考えていきたいと思う。

図3



理想の老人福祉図

V 総　括

私は今まで話を聞きに行ったり、資料を集めたりということをしたことがなかったため、初めは手まどってしまった。計画がはかどらなかったりしたが、いい経験になったと思う。市役所・さやま荘・保健センターでは優しく教えて頂き本当にうれしかった。一部ではあったが老人の気持ちも知ることができた。私たちが老人になった時、豊かな時代に育ったため、今以上に老人福祉は大切になってくると思う。そんなことで、若い人々の「老人福祉に対する考え」を聞けなかったのが残念だ。でも福祉に興味を持つことができ、よかったと思う。

（協力）
大阪狭山市役所
さやま荘
大阪狭山市立保健センター